

ハイデルベルク信仰問答より

問 128 この祈りは、どのように終わっていますか。

答え 「国と力と栄えとは、限りなく汝のものなればなり」であります。私たちは、あなたが王としてあらゆるものを支配なさいますので、善いものはすべて喜んで与えてくださり、また与えることができる方でありますから、一切のものをあなたに求めるのであります。そのことによって、私たち自身ではなく、あなたの聖き御名が永遠に崇められるためであります。

〔別訳〕

答え 「国とちからと栄えとは、限りなくなんじのものなればなり」というようにです。すなわち、わたしたちがこれらすべてのことをあなたに願うのは、あなたこそわたしたちの王、またすべてのことに力ある方として、すべての良きものをわたしたちに与えようと欲し、またそれがおできになるからであり、そうして、わたしたちではなく、あなたの聖なる御名が、永遠に讃美されるためなのです。

「国と力と栄えとは、限りなく汝のものなればなり」——

私たちが馴染み親しんでいる主の祈りの結びのフレーズは、原文には存在しなかったのではないかとされています。日本語訳を比較してみると、この部分に大括弧が付けられているものや、そもそも訳されていないものがほとんどです。それは、最も重要な古い写本にこのフレーズが含まれていないためです。しかし、2世紀初頭に成立した『十二使徒の教訓』の中には「力と栄えとは限りなく汝のものなればなり」というよく似た頌栄が早くも出てきます。そして2世紀以降、少しずつ違った形で多くの写本やマタイ福音書の訳本の中に登場するようになりました。私たちも、主の祈りをもし第六の祈願——「われらを試みに会わず悪より救い出し給え」——で終えたとしたら、どこか物足りなさを感じるのではないでしょうか。

主の祈りの結びのフレーズのベースとなっているのは、歴代上 29 章に出てくる「ダビデの賛歌」の一部かもしれません。

主よ、偉大さ、**力**、誉れ、輝き、威厳はあなたのもの。まことに、天と地にあるすべてのものはあなたのもの。主よ、**王国**もあなたのもの。あなたは万物の頭として高みにおられます。富と**栄光**は御前より出、あなたは万物を支配しておられます。勢いと力は御手にあり、その御手によってあらゆる者を大いなる者、力ある者となさいます。(歴代上 29:11-12)

もしこの箇所との関連があるとしたら、主の祈りの結びのフレーズを作った人は、すべての栄光を神に帰することを目的としていたと言えるでしょう。

私たちが主の祈りを唱えるとき、そこには「自己中心性」というものが含まれていないことに気づかされます。人の一般的な祈りは、多くの場合自分の願いが中心に置かれる傾向があります。しかし、主イエスご自身が教えてくださったこの祈りは、

- ・ まず神の御名が崇められ、
- ・ 御国の支配が到来し、
- ・ 御心が天で成るのと同じように地でも成ることを求めます。

そして、自分のために祈る後半においても、

- ・ 日々の糧、
- ・ 罪の赦し、
- ・ 試みからの守りという、

肉体と霊にとって不可欠なものばかりであって、自分の野心や欲望に関わる内容は含まれていないのです。これまでに学んできた一つひとつの願いを振り返るとき、私たちが人生全体において求めるべきものとは「神の視点」であるという結論に至ります。

主イエスご自身も、ゲッセマネの園でこう祈っておられます。

少し先に進んでうつ伏せになり、祈って言われた。「父よ、できることなら、この杯を私から過ぎ去らせてください。しかし、私の望むようにではなく、御心のままに。」（マタイ26:39）

これから通らなくてはならない究極の試練の前に、主は恐れ慄き、その状況から逃げ出したという思いを父なる神様の御前に吐露しました。しかし、その祈りは最終的に「**しかし、私の望むようにではなく、御心のままに**」と、自分の思いを神に委ねるところに到達します。

私たちも「**国と力と栄えとは、限りなく汝のものなればなり**」と唱えるとき、祈りを教えてくださった主イエスと同じ心になれるよう願い求めたい。職場での評価が得られないとき、家庭で理解されないとき、私たちは『自分の国・力・栄え』を求めがちですが、主の祈りの結びは、そうした願いをもう一度“神のもの”として委ね直す道を指し示します。

こう言い直してみてもいいのでしょうか。

「主よ、祈りの最後にいつもあなたを王と仰ぐ心を私たちに与えてください。」